

壬晴雨日記

文久三晴雨日記

癸亥年

文久四年甲子改元有晴雨日記
元治元年ト相成

類書には次のやうなものもある。

安政三年丙辰運氣造 志村恒憲撰 (寫本)

運氣考抄略 (寫本)

晴雨考類版の所在について

神 田 茂

本誌前號で主として名古屋版の晴雨考について調査の結果を記述した處、大矢眞一、平山謠兩氏からその類版について種々御教示を受けた事を厚く感謝する。前號寄書欄で運氣考、雲氣考、氣候懸斷録、勸農晴雨談提要等の名で刊行されてゐるものが晴雨考と類似の内容のものである事を大矢氏が指摘されたので、これ等の書物の所在を調査して見た處、運氣考、氣候懸斷録の二種は大矢氏の紹介された以外に數本の所在が判明した。

運氣考

安永八年 第八高等學校下郷文庫、井本文庫

同 九年

寛政二年 下郷文庫、小田尙文堂目錄

寛政四年

井本文庫、帝國學士院 (寫本)

東北帝大所蔵の晴雨考に就いて (平山)

以上東北帝大所蔵

寛政四運氣考 (寫本)

年壬子運氣考

帝國學士院蔵
尙は神田氏の記事中にある『日用晴雨管窺』は帝國學士院に

り、その著者は氏の推定通り棚橋泥尾子である。又『天文候鑑』

は東北帝大にあり、棚橋泥尾子撰、深井短梗子校、尾州名古屋本

町七丁目永樂屋東四郎刊である。

下郷文庫所蔵のものは江匡弼撰との事であすから大矢氏紹介のものと同じである。安永八年井本文庫のものは井本進氏の御厚意により借覽の機會を得たが、最初に土御門家御免とあり、序及び本文の最初に菊丘臥山人江匡弼文披撰とある。内容は五運六氣の説により年中の晴雨を判斷してゐる事晴雨考と同じである。巻初に中川文化堂蔵版とあり、終に皇都書林堀川蛸薬師下ル町中川藤四郎蔵版とある。津市山田尙文堂目錄「古書蒐集」己卯第一輯(昭和十四年十一月)に「庚子運氣考中形一冊」とあるものは現在の所在は不明であるが附記する。

寛政四年の井本文庫所蔵のものは同じく中川文化堂蔵版のものであるが、序文が少しく變つて居り、延景齋精果題とあり、本文の始に武田九龍子撰とある。平山氏も挙げて居られる帝國學士院

のものはこの寫しである。井本文庫の運氣考二冊は本誌前號に記されてゐた、大阪鹿田松雲堂より入手されたもの由である。

氣候懸斷錄

大矢氏紹介のもの他に次のものがある。

* 函學莊舍目録「ちか一二三號」 享和三年

井本文庫

文化二年

宮内省圖書寮

天保九、嘉永二、安政七年

* 國書解題四三六頁

天保十年

* 明時館圖書目録

天保十一年

尾島領宥氏

天保十二、弘化五、安政七年

* 印のものは現在の所在は不明のものである。享和三年のものは白龍菅正信著とある。明時館圖書目録とは澁川家の曆書目録で、現存のものではない。これによつて氣候懸斷錄は少くとも享和から安政迄約六十年間續いてゐたもので、名古屋板晴雨考と同時代に西國方面にて用ひられたものであらうか。

「晴雨考の類版」補足

前號で晴雨考の類書に就いて書いたところ、尾島領宥翁から早速これに記載のない同種の書物の御教示を賜つた。又その以後私自身が見出したものも一二あるので、それ等を一まとめにして次に記録して置く。

* * * *

以上の調査によつて京都版運氣考は年代から考へて晴雨考に先つて行はれたものであり、播州の氣候懸斷錄、尾州の晴雨考がそれに續いて享和、文化の頃から弘く世に行はれ、仙臺版の運氣考、晴雨考が稍遅れて弘化嘉永の頃から東北方面に行はれたものと思はれる。他の類版は恐らく一地方に限られて行はれ、年代も永くは續かなかつたものであらう。

以上尾島、大矢、平山、井本諸氏の御教示によつて晴雨考の過去に於ける年代的並に地方的存在の輪廓をかなり明かにし得た事を感謝する次第である。

(追記) 大矢氏によれば愛知縣刈谷圖書館に安永七年、天明三年、九年の運氣考が現存し、何れも江匡鋤序文のものである由。又筆者は最近安政六年の氣候懸斷錄の一寫本を入手した。

(昭和二十年三月)

大 矢 眞 一

1、(安政四年)晴雨考 加賀岡松任版(金澤市立圖書館藏)
縦五寸三分、横三寸五分の小冊子で普通の晴雨考より型が小さい。巻頭には運氣論による當年の氣候の概説があるが、これに普通のものより簡單である。その後一ヶ年毎日の晴雨が○晴、○曇、